

浄土

monthly JODO

2021
September

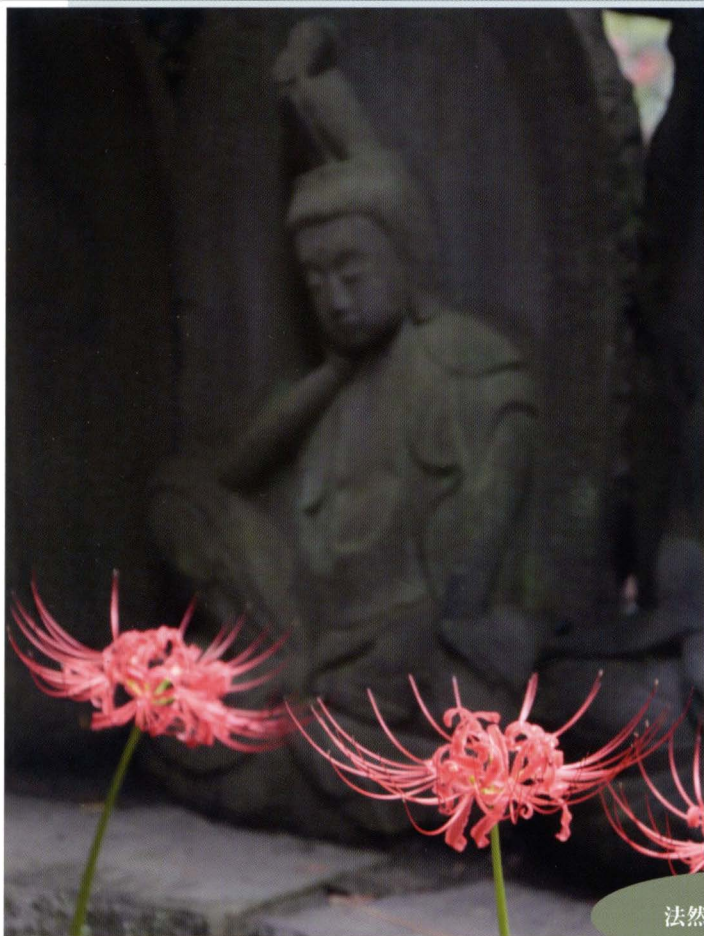
令和3年

vol.87

no.956

〔インド紀行〕

王舎城巡礼（ウォーキング フォー ピース） 佐藤良純



〔新連載〕
町医者雑誌「コロナと根競べ」大田由己子（ゆき医院）
〔寺院紀行〕
東京・山谷 光照院 真山 剛

法然上人鑽仰会

古物漂流

文と写真●三宅政吉
(グラフィックデザイナー)

連載7 フランスのケーキ人形

代々本公園のけやき通りの骨董市で見つけたのが写真の人形である。もう五年ほど前のことになる。菓子箱にごっそり入っていた。一〇〇体はあっただろうか。どれも小さなもので、左端のいちばん大きなもので四〇mmほどである。陶製で、鮮やかな色が塗られている。それぞれ違った形をしている。三個一二〇円の貼り紙。一個四〇円、良心的な値付けである。いくつか手にとって眺めていると、店主が近寄ってきた。

「この人形はなんだろう?」「フランスでケーキの中に入れるんですよ。切り分けてこの人形に当たると一年間幸せでいられるという風習があるとか」「ここにあるのは古いものなの?」「古いものも新しいものも混ざっています。どれが古くてどれが新しいかはわからない」

すべてが古物というわけではないということか。たくさんある中から、可愛い色使いのものを選んだのが写真の六体である。いずれも簡単な色着けながら、表情やポーズなど生き生きとしている。

帰って調べてみると、なかなか面白いことがわかった。この人形はフェーブ（フランス語でそら豆）と呼ばれるもので、一月六日の公現節にアーモンドクリームが入ったパイ（ガレット・デ・ロワ）に一つ入れ、家族で切

り分けて食べ、フェーブが当たった人はパイを飾った王冠をかぶり祝福を受ける。その幸運は一年間続く。

「ロワ」とはフランス語で「ロワ・マージュ」(rois mages)と呼ばれる東方の三博士のことである。

公現節とは西方教会（カトリック教会やプロテスタント諸派）において、イエス・キリストの顕現を記念する祝日。元は東方教会（正教会、東方諸教会）の祭で、イエスの洗礼を記念するものであったらしい。それが四世紀に西方教会に伝わり、現在の公現節となった。その際にヨルダン川でのイエスの洗礼の意味は失われ、幼子イエスへの東方の三博士の訪問と礼拝が記念の中心となり、異邦人に対する主の顕現として祝われるようになった。

簡単に言えばキリスト教における主の顕現を祝うものである。もともとは人形ではなく、その名の通り本物のそら豆を入れていたが、一八七〇年頃から陶製の人形が使われるようになった。今年二月に東京・新井葉師梅照院の骨董市でケーキ人形を見つけた。一体二〇〇円の値段がついていた。わずか五年で五倍の値上がりである。



人形に歴史的なモデルがあるのかどうか不明。
左の人形は持ち帰るさいに右手が取れてしまった。

東京・山谷

光照院

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



光照院第二十四世
吉水岳彦住職



光照院本堂

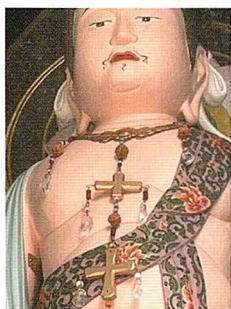


光照院内陣と
本尊阿弥陀如来坐像





墓苑入り口正面の「あさくさ山谷観音」。
首には十字架のネックレスがかかっ
ている。多くの無縁の方々眠っている



光照院本堂裏にある「こども極楽堂」。近隣を
はじめとする生活困窮家庭の子供のための施
設であり、ひとさじの会の炊き出し場所でも
あり、吉水住職の社会福祉活動の拠点になっ
ている





慈しみに満ちた社会を目指して
貧困問題に取り組む

社会慈業委員会 ひとさじの会



ほんのひとさじ
困難を抱えた方がたとの
こころの寄り添い

ひとさじの会の案内チラシ。
表紙のお坊さんは吉水住職がモデル？

ひとさじの会に寄付されたお米はこども極楽堂に集められ、分配されていく



仏間には色々な仏像が祀られている



浄土

2021/9月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 東京・山谷 光照院	1
寺院紀行 東京・山谷 光照院.....	真山 剛 6
寺々刻々⑬ イエバエを供養する	鵜飼秀徳 12
連載小説「式子内親王遺文」第5回	石丸晶子 18
新連載 町医者雑記「コロナとの根競べ」.....	大田由己子 26
連載 インド紀行⑭「王舎城巡礼」.....	佐藤良純 29
漫画「浄土宗のお祖師様」三祖良忠上人②	ぐんじまん 33
ぶつぶつ放談「仏教×マンガ②」	佐山拓郎 工藤量導 大橋雄人 36
微風吹動「この世と不可思議」	名和清隆 44
江戸 日本の街道探訪 第7回	森 清鑑 48
みんなの境内	56
新ホームページ開設のお知らせ	58
編集後記	60
表2 古物漂流⑦	三宅政吉



表紙題字=中村康隆元浄土門主
表紙写真=若林隆壽
アートディレクション=近藤十四郎

寺院紀行

東京・山谷

光照院

こうしょういん

まやま ころ

1958年東京生まれ。大学卒業後出版社に入社、男性月刊紙の編集部に12年間勤務。その後フリーとなり主に寺院関係の編集や執筆に携わっている。

文・撮影／

真山剛



こども極楽堂の2階にはこどもたちやこどもを失った親御さんのための絵本が並んでいる

路上生活者に寄り添う

「明日の取材ですが、少し時間を遅らせてもらえますか」夜10時近くの話は翌朝9時からの取材時間の変更の相談だった。

電話の主は光照院の古水岳彦住職。

「先ほどの上野の夜回りで、体調のすぐれない路上生活者の方がいて、明朝8時に迎えに行き無料の診療クリニックへ一緒に行くことになりました」

古水住職は12年前、貧困問題に取り組む社会滋業委員会「ひとさじの会」を立ち上げた。上野や山谷などで路上生活をする人たちに声がけをし、食事や寝袋を提供、話を聴いて歩く活動が有名で、コロナ禍ではマスクも配るという親身な活動を地道に続けている。

この活動はテレビ等でも何度も取り上げられているので、作務衣姿の古水住職が生活困

窮者と同じ目線になるよう、地べたにしゃがんで声をかける姿を見たことのある方も少ないだろう。

二度目の取材時はNHKラジオの二つの番組の収録打ち合わせの後だった。本誌が発行される前後にNHKの宗教関連番組組がオンエアされるといふ。また、婦人雑誌で取り上げられたページも拝見した。

東日本大震災後、被災地や被災者の支援を行う多くの僧侶たちをマスコミが取り上げたが、今は社会福祉に関わる僧侶が注目を浴び始めているようだ。

さて、光照院の現在の住所は台東区清川だが、『鬼平犯科帳』の第一話冒頭に「山谷堀」を渡った浅草の北のはずれ、新鳥越町にある寺として光照院が登場する。この地は江戸時代から山谷と呼ばれる地域で、今はソープラント街となった古原に近く、ビジネスホテル



20年前の大阪の池田小学校事件でお子さんを失った本郷由美子さんのライブラリー「ひこばえ」がこども極楽堂に昨年11月に開かれた

と名前は変えた安宿やが並ぶ、日雇い労働者や路上生活者の多い下町だ。「あしたのジョー」に登場する汨橋の交差点も近い。そんな山谷で吉水住職は生まれ育った。

「子供の頃から、そうした人たちや街並みは日常生活の一コマでした。そして、彼らは自分とはどこか異なる存在だと思っていました」と以前の自分の心をさらにと振り返る。

「十三年前、知人に誘われ新宿の路上生活者への炊き出しを手伝いに行きました。まず、炊き出し作業に路上に暮らす人たちが加わっていて驚きました。そしてご飯を食べはじめると、そのうちの一人が隣に来て話し掛けてきて、子ども時代のことや家族の話をするのです。その瞬間、あっ、この人たちも自分と何も変わらない、と気付かされたのです」

今でもその時のことは鮮明に覚えている。吉水住職を変えた一瞬だった。

光照院歴代住職と山谷

光照院がここ山谷に鳥越から移ってきたのは慶安3（一六五二）年。地名も新鳥越となり、穢多頭の弾左衛門も一緒に移ってきた。当時の境内は現在の十数倍、現本堂裏からさらにワンプロック向こうの大通りに山門を構え、伽藍は総檜造り。しかし戦争で焼失、焼け野原となった広い境内は「住み着いた者勝ち」。東京の他の寺院同様、寺領、境内地の多くを失った。

この光照院の戦後の復興を支えたのが、光照院と縁のあった山梨の果物農家から3歳で養子にきた四男、先々代の吉水現祐住職だ。先々代は文部省に務めた後住職になり、台東区の区議会議員にもなった山谷では有名なお坊さん。終戦後、焼けた釘で焼けた瓦に子供達と一緒に絵を描く大の子供好き。人形劇団

「ひこばえ」ライブラリーには何冊もの絵本が揃えられた安らぎの場所になっている



を作り戦争孤児の慰問に回り、地元の子供会も作った。また、吉原で働く女性たちにも手を差し伸べ、浅草仏教会の年末助け合い募金活動も立ち上げた。地元に着し地元尽くした僧侶だ。

その背中を見てきたのが先代の吉水裕光前住職。小学生の頃から中学生と一緒に子供会活動を手伝い、高校生の時には先代から子供会を引き継いだ。区が設立した青少年少女団体連盟の設立にも関わり、そこから台東区ジュニアリーダーサークルを結成した。また、光照院が属する浄土宗東京教区北部組に青年会を作るなど有言実行の人。

二代続いた「実践するお坊さん」の血が間違いなく吉水住職に受け継がれている。

目の前の困っている人に……

取材にあたり、吉水住職が自らに関わる団

体や職場など一覧表にしてくれた。この本文の最後に生活困窮者支援関係の団体の一部を載せたが、元の資料には東京で13、東北、関西、九州に7、ベトナム、台湾の在日外国人支援団体2つで、全部で22団体にも及ぶ。

『どの団体も愚直に一つのことを続ける信念と実行力を持った方が関わっています。社会福祉活動は理想を語るだけでなく、実際に何を行うか、そして続けるかです』

生活困窮者は大人だけでなく、今東京では食事に困る子供たちが増えていて、子供食堂が増え続けている。そこで四年前に光照院の裏手、檀家に貸していた建物をこども極楽堂にリフォームした。子供達の憩いの場所であり、ひとさじの会の拠点にもなっている。

社会福祉活動に色々な声が寄せられるという。その多くは応援メッセージだが、「一人の路上生活者を救ったところで次なる路上生



光照院の墓地には、身寄りのない方や生活困窮者が入るお墓が何基も立っている。結の墓もそうした共同無縁墓のひとつ

活者が生まれるだけ。社会を変えないと」、「生活困窮者は自己責任だ」といった活動に水を差すような意見を言われることもある。

「私はただ、目の前にいる生活に困った人に向き合うだけです。彼らは自分たちと変わらない人達、でも、今は困っている。だからまず声をかける。ただそれだけです」

浄土宗僧侶が普段読む経の一節に「普濟諸貧苦」という言葉があると教わった。あまねく諸々の貧しき人々、苦しむ人々を救うという意味だそうだが、吉水住職は愚直にそれを実践しているということだ。

生涯独身、一僧侶

そうした吉水住職の生き様を物語るエピソードを二つ。

社会福祉士の資格取得を目指した折、「わたしはもう僧侶としての視点でしか、他者を

見ることが出来ない」という自分に気づいて、最終試験はあえて受けなかったという。

二つ目は生涯独身。理由は「家族を幸せにすること、仏法をわが身に行うこと、どちらも片手間ではできないもの。無器用なわたしにはひとつを選び実践することさえ、難しいと思う」から。

最後に、活動に必要な資金や活動の将来について聞いてみた。

「多くの人がボランティアを申し出てくれます。ひとさじの会を応援してくれる方は徐々に増えてきて、今は活動に十分な寄付や品物も集まっています。みなさまからのお支えのもと、今後もできることを無理なく続けていきたいです」

吉水住職、芯は強くしなやか、そして純粹。山谷の光照院は地域社会にとってかけがえのない寺になっている。



客間で取材を受ける吉水住職。飾ることなく心を開いて質問に答えられていた

吉水岳彦住職が関わる主な生活困窮者支援団体

《新宿》「つくろい東京ファンド」

住まいの貧困に向き合って活動する団体。

「稲葉代表とのご縁から光照院に結の墓を建立」

《新宿》「NPOもやい」

生活困窮者のア生活相談、支援、入居を行う。

《新宿》「NPO新宿連絡会」

炊き出しから始まり、夜回りなどひろく困窮者を支援する

「正月前後にひとさじから寝袋運び一緒に配布します」

《新宿》「ビックイシュー・ジャパン」

路上生活者の社会的企業の代表的存在。イギリスなど海外で発展し、

日本でも路上で雑誌を販売し、路上生活者を応援

「『りんりんふえす』という音楽の祭典＆社会問題啓発イベントを10年ほど一緒に続けてきました」

《山谷》「NPO山友会」

宣教師のルポ・ジャンさんが始めた無償の医療と生活支援、居場所支援などを行う40年以上の歴史ある団体。

「事務所に阿弥陀仏・マリア同居の神仏壇を安置し、光照院に墓を建立」

《山谷》「NPO訪問看護ステーションコスモス」

20年以上活動する訪問看護ステーション。山谷のドヤなどのおじさんたちの医療を担う。数年前に、光照院にお墓を建立

《山谷》「ほしのいえ」

80歳代のシスターが代表の路上生活者支援団体。シスターたちが手作りでお弁当を配布、生活相談も受けている。

《山谷》「あうん&あじいる」

「あうん」は生活困窮者の仕事づくり団体、転居後の部屋の清掃と古い家電や家具、雑貨の修理と販売などを行う。「あじいる」は「あうん」の代表たちの子供世代の医療とフードバンクを行う団体。

《山谷》「NPOきぼうのいえ」

死を待つ人の家の日本版ホスピス。キリスト者の夫婦が発足

《埼玉》「在日ベトナム仏教信者会」

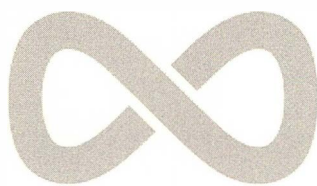
ベトナム人僧侶のティック・タム・チー師が代表を務める団体。

「災害被災地支援や困窮者支援等を何年も一緒に行ってきた仲良しの団体です」

『お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県』著者

鶴飼秀徳の

寺々刻々

「イエバエを供養する」
あるベンチャー企業の挑戦

MUSCA

ムスカのロゴとロゴマーク

「やれ打つな 蠅が手をする 足をする」

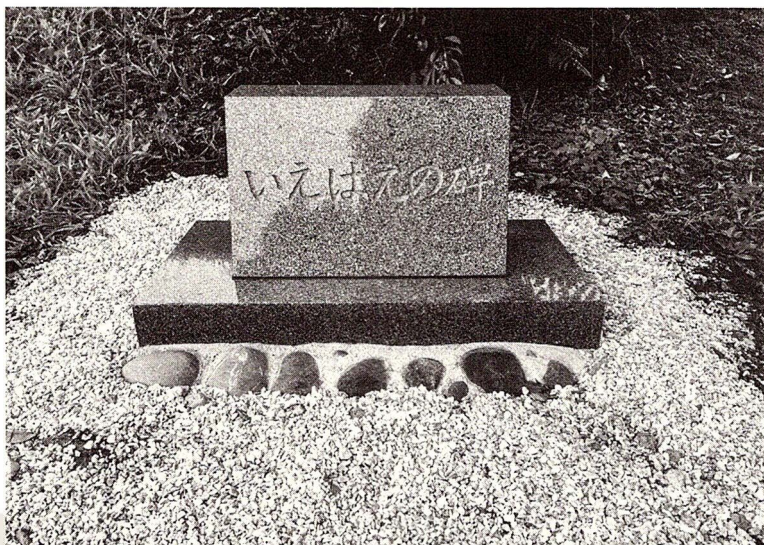
江戸時代の俳人、小林一茶が59歳の時に詠んだ句である。ハエは夏の季語。この時期、食べ物などを放置するとすぐに集ってきて、不快極まりない。昔はハエ叩きで追いつめたものだが、今では殺虫スプレーを、ひと吹きで一茶は、そんな小さなハエにも慈悲の心を持って観察した。すると手を合わせ、命乞いをしているように見えた。一寸の虫にも五分の魂。一茶の仏心の篤さが垣間見える一句である。

さて、本稿ではハエにまつわる供養の話をしたい。ハエを供養し、墓までつくった人物が現代にいるのだ。

ハエの幼虫を養殖魚の餌にする技術を提供しているベンチャー企業、ムスカ（東京都日本橋）の社長、串間充崇さんである。ムスカという社名は、ハエの学名「ムスカ・ドメステイカ」にちなんだもの。

同社では先述のように、養殖魚用のエサとしてのイエバエを利用し、また、その過程でつくられる農業用肥料を開発、販売している。前身の会社を含めると、これま

ムスカの研究所に建てられたイエバエの供養塔



での開発期間は45年間にも及ぶ。何十億匹、何百億匹、あるいは何千億匹という天文学的な数のハエが、同社の開発と成長を支えてきた。

串間さんは、多大なるハエの犠牲のもとに自社の繁栄があることを肝に銘じているという。それゆえ、会社に祀られている神棚に手を合わせるのが日課になっている。串間さんは大真面目な表情でこう話す。

「ハエ様あつての会社です。ハエへの感謝の気持ちを込め毎日、私も社員も手を合わせます。『ハエちゃん、今日もありがとう』などと、声を掛けてね」

これまで私は、ハエは病原体を媒介する害虫で「百害あつて一利なし」と考えていたが、串間さんの話を聞くうちに、その認識はとんだ誤解であると気付いた。

ハエの起源は古い。1億年以上も前、白亜紀の時代の琥珀から、閉じ込められたハエが見つかった。ハエは生物史における「ゴミ処理班」として、地球上では、なくてはならない存在であり続けているのだ。

ハエの高いゴミ処理能力は、その生命サイクルの速さ、

高野山の奥の院にある「しろあり」の供養塔



繁殖能力の高さとも関係している。イエバエは卵を産んでから孵化するまでがわずかに8時間。さらに1週間以内で、幼虫からさなぎへと変態していく。ハエの雌は一生で500個程度の卵を産む。1対のハエが全て生存したとするならば、その合計は4ヶ月後には20万匹にもなるという。

このイエバエの特性に注目したのが、同社であった。同社の前身会社である先代社長が20年ほど前、ロシアから宇宙開発において研究されてきたストレスに強いイエバエを取り寄せ、改良を重ねてきた。

旧ソ連では宇宙に長期滞在するための食料循環サイクルをハエに見出そうとしていたという。人糞の処理をハエに任せ、さらにそのハエを貴重なタンパク源にするという画期的な計画だった。

この発想をムス力ではハエのエサを家畜の糞に置き換えた。糞をイエバエに分解させれば、短期間のうちに農業用有機肥料に100%リサイクルできる。さらに、その過程で増殖する幼虫（ウジ）を集めると、養殖魚の格

昆虫を弔う歴史は長い。幕末の嘉永年間に立てられた
魚類や虫の供養塔「一切亡虫魚墓」(三浦市の福泉寺)



好の飼料になるという。

イエバエを使った肥料や飼料の生産過程は実に合理的だ。ウジのエサとなる動物の糞尿は酪農家を通じて安価に手に入れることができる。通常、家畜糞尿を堆肥化させるには3〜6カ月かかるがイエバエを使うとわずか1週間で済むという。

さらに、ウジはさなぎになる時には自ら糞の外に出てくる。ペレットの上に糞尿を置き、ハエの卵を接種。分解処理が終われば自然とウジが這い出て、ペレットの下に落ちてくる。そのため、ウジの回収は簡単だ。

近年、養殖業で不可欠な魚粉飼料の価格が高騰している。20年前に1kg当たり50円以下であったものが、直近の2020年には170円程度までになっている。理由としては、中国をはじめとする新興国の海産物の消費量が増え、飼料の原料となる魚粉の需要が伸びていること。同時に、魚粉の主原料になるカタクチイワシやアジが枯渇してきたことが挙げられる。つまり現状の養殖業では、魚で魚を育てるという矛盾と無駄が生じているのだ。

ムスカ串間充崇社長（ムスカホームページより）



コストをかけずに養殖魚を育てるための飼料の調達は、日本の水産業界において急務になっていた。

ハエで育てたマダイは、魚粉で育てたマダイに比べて成長が早く、色が鮮やかになることも実証されている。魚粉に替わる夢の代替昆虫がイエバエというわけだ。

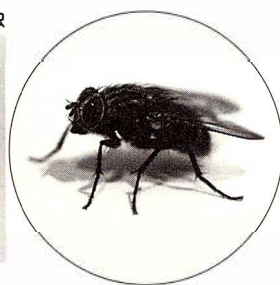
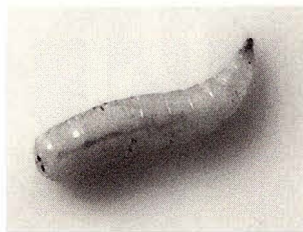
さらに、イエバエは世界食糧危機の切り札としても注目されている。2018（平成30）年の世界における飢餓人口は8億人以上と言われる。アフリカ大陸を中心とする食糧難の地域で、畜産、漁業のニーズの拡大は急務である。イエバエを使った食糧危機回避策も、今後、大いに注目が集まることだろう。

ムスカの事業は、まさに一石二鳥かつ、未来型のビジネスモデルと言えるのだ。

だが虫を使ったビジネスとは言え、大量の命を奪っていることにはかわりが無い。先述のようにペアのハエが4ヶ月後には20万匹にもなるわけだから、45年間の開発期間を有する同社におけるハエの犠牲は計り知れない。

輪廻転生という考え方がある。ハエは昆虫の分類群で

イエバエとウジ虫



イエバエ

- 学名 ムスカ ドメスティカ
体長 4～9ミリ※メスの大きさは多様
寿命 成虫となり約1か月（産卵から羽化までは12日）
特徴 世界に広範囲に生存する昆虫のひとつ（原産地は中東）

うかい・しゅうつく 1974年京都市生まれ。大学卒業後、新聞・雑誌記者を経て2018年にジャーナリストとして独立。「仏教界と社会との接点づくり」をテーマに活動を続ける。最新刊に『お寺の日本地図 名刹古刹でめぐる47都道府県』（文春新書。東京農業大学・佛教大学非常勤講師、一般社団法人「良いお寺研究会」代表理事。京都教区正覚寺住職）。

は、双翅目（ハエ目）に分類され、12万種にも及ぶ地球上で最も個体数の多い昆虫のひとつであるから、人間界から畜生界へと堕ちた肉親や友人が、来世でハエになるケースも大いに考えられる。一方、仏教徒には、守るべき五戒のうち最も大切な「不殺生戒」がある。

有り難くハエの命を頂く――。ムスカの社員も常にハエの魂に手を合わせ、感謝の気持ちを表現しているという。宮崎県都農町の同社研究所内には供養塔も設置した。串間さんはいう。

「我々はハエによって事業が継続できていることへの感謝の念はもちろんのこと、ハエは人類の財産であり、その命は粗末に扱えないと考えています。ハエがいなければ、人類は存続できない可能性すらあるのです。私は生きとし生けるものすべてに魂は宿っていると信じています。ハエと人間の遺伝子は70%同じなのです。死後世界はハエにだってあるはず」

串間さんに、現代の小林一茶をみた。

式内親王 遺文子

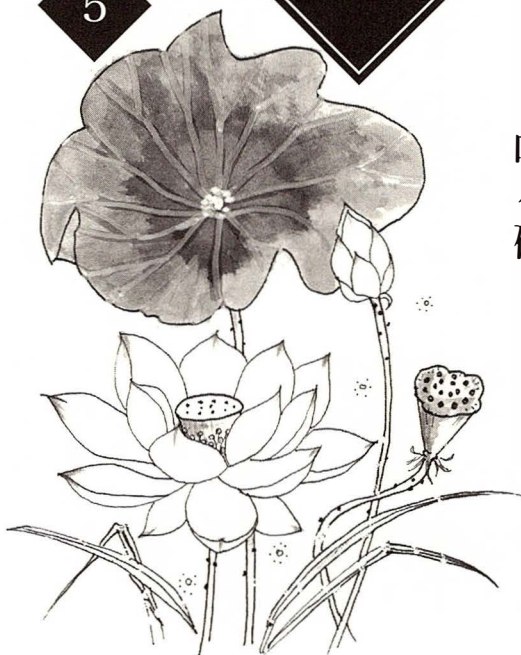
連載
小説

その
5

絵

石丸晶子

啞々砂



いしまる・あきこ 1965年東京生まれ。
東京大学文学部、同大学院博士課程修了。
近代文学を専門とするが、日本古典の著作
も多く、1991年、『式内親王伝』（朝
日新聞社）で紫式部文学賞を受賞。東京経
済大学名誉教授。著書に『お手紙からみる
法然さま―そのお人柄―』短編小説『月
影の使者』（ともに浄土宗出版）など多数。

そう女院に応えられた師父は、つづいて次のようにいわれた。「わたくしたちはみな、弥陀の前では罪ふかい者です。それゆえ念仏は『弥陀仏罪ふかいわれを憐れみ、御慈悲をもつて救い給え』という真の心をもつて称えなければなりません。念仏は口先で称えるものではなく、心から前非を悔い、今より後は少しでも罪を犯すまいと決心する心をもつて、弥陀の本願に寄りますることこそが大切です」

師父の言葉に女院はうなずきながら、

「御房は叡山で修行をつまれた後、天台の教えに飽きたらず山を下りられたと聞きおよび、天台のどこを飽きたらず思われたのであらうの。わたくしなどは天台真言の高僧から教えを聴聞して加持祈祷をうけなすと、極楽浄土につれていかれた感動がこみあげてくるが。御房は加持祈祷を嫌ってなさらぬと聞くが、どこがお嫌いなのであらう」

当時、天皇家の帰依をうけ貴族社会に浸透しているのは天台・真言の密教系仏教と陰陽道であった。

皇族をはじめ高位の貴族たちが紫檀や水晶で作られた数珠を手に見まもる中、きらびやかな袈裟をまとった叡山や園城寺、東寺・仁和寺などの高僧たちが香木の敷き詰められている護摩壇に火を投じると、香りがあたり一面ゆらゆらと立ちのぼる。そこで、金襴の袈裟をまとう高位の僧たちはいっせいに陀羅尼や経文をとねえはじめる。

それは女院が仰せのとおり、居ならぶひとにとつて、たしかに浮世のくさぐさを忘れさせる至福の時間であった。

「私は加持祈祷が嫌いなわけではありません。また天台を嫌って山を下りたのでもないのです。ただ……」

師父はお応えになる。

「叡山におりました時、わたくしは万民平等にむけられているはずの仏の慈悲をめぐって苦悩いたしました」

女院は鷹揚おうちやうに頷かれて、

「聞いておりますぞ。御房はそのことで二十五年の歳月を苦悩されたとか。長い年月をお

悩みになりましたの」

「叡山で学びました多くの經典には、往生への要件として智慧と学識、持律持戒の尊きことを説き、さらに造寺造仏の功德を説いておられます。しかし、世のなかを見ますと、造寺造仏ができる富貴の者は少なく、いかにその心はもつていてもそれのできぬ貧者はみちあふれております」

「いかにものう」

女院は頷かれると、

「智慧と学識を持ちとうても生まれつき愚かな者もおるものよ。持戒持律の者となりとうても心弱う、破戒無戒の者となって墮ちてゆくのが凡夫というもの。御房は仏の慈悲が奈^{いか}辺にあると悩まれましたか」

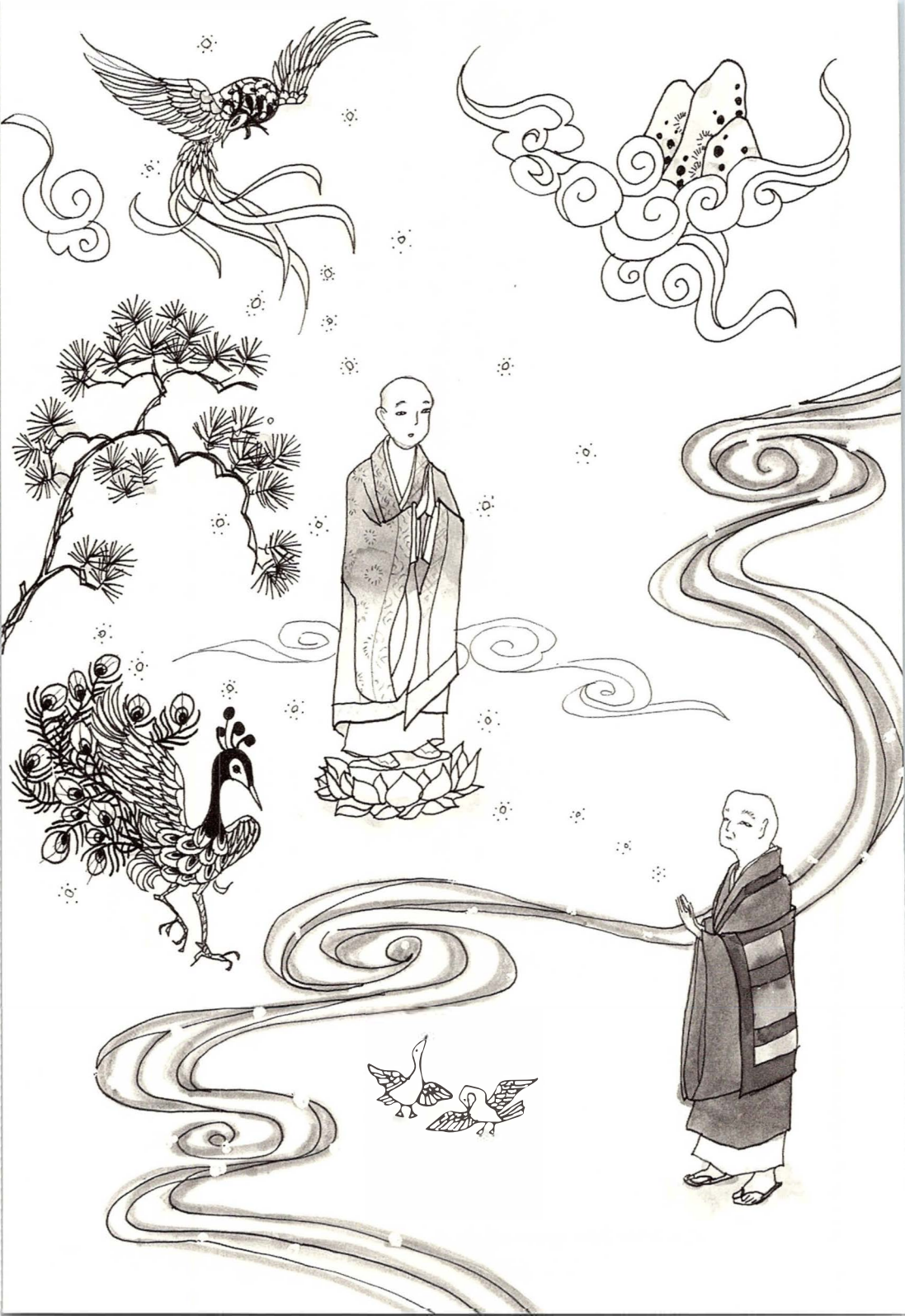
「女院様が仰せのとおりでございます。人の世を見ますと富貴なる人は少なく、智慧ある人も少ない。持戒の者は少なく破戒無戒の者は人の世に多いのです。すると、浄土往生は多くの人々にとって不可能なのであるうか、仏の慈悲とは何なのであるうかと」

「御房がこのことで長い歳月を苦しめたとは、御房にはそれだけ万民放済の願いが切実であつたからでありましょうの。わが身ひとつの救済を願うて息をひきとるまぎわに出家する公家なぞは多いが、御房が若くして万民救済の道をもとめて苦悩されたとは、まこと、尊く思いますぞ」

「道なく、夜明けなき闇夜が生涯つづいて終わるのか、苦しい歳月でございましたが、唐の善導大師が經典を釈された著書の一節に出会い、仏の慈悲が万民にむけられていることに気づきました。善導大師の釈書にはそれ以前にも何度も出会つておりましたのに目が覚めず、その時突然、闇夜が突きぬけ、天空がひらいたのを知りました」

「尊い歳月であられましたぞ。尊く思いますぞ」女院がしきりに頷いておられると、横から兼実が女院に向かつて、

「女院様、すでにお聞きおよびかとは存じますが、法然房は都の公家衆の出ではなく、遠く美作^{みさく}稲岡^{いなおか}庄^{しょう}の出で、若年にして叡山に登り、



勉強中は早々にして智慧學識に群をぬき、『叡山第一の秀才』と感嘆された由にございます」と取りついだ。

「美作の出であられたか。して何歳で叡山に登られた」

「十三歳でございます」

「それは又、早うから発心されたものよ。両親はよう御房を遠くへ手放されました。御房にも両親との別れはお辛かったであろう」

女院はしきりに頷きながら、

「叡山では何年修行された」

「実は女院様」と兼実が女院の言葉をひき取って、

「これもすでにお聞きおよびかとも存じますが、十三歳にして法然房が叡山に登ったのに関しましては、美作の国の押領使であつた父が、近隣の豪族に押しかけられ、不慮の死をとげたことがあつたやに聞きおよんでおります」

「何と。父君の不慮の死とは！」おどろいて女院は師父を見つめられた。

「その父が息を引きとる間際、時に九歳で

あつた法然房に遺言があり、その遺言によつて出家得度したと仄聞しております」と兼実。「おお、父君が遺言なされてか」女院は師父にお訊ねになる。

「法然房殿、女院様に申しあげられよ。父君の遺言を」兼実が言つた。

「恐れ多く存じます」

師父はそうお応えになると、

「父が息を引きとるまぎわ、当時、九歳の私に申しましたことは、『決して敵人を恨んではならぬ。もし仇を晴らそうとするならば、争いは果てることがないであろう。それよりもそなたは一刻も早く俗をのがれ、出家して父母の菩提を弔い、自らの解脱を求めよ』というものでございました」

「おお、何というご遺言であろう」深い吐息とともに女院は感嘆された。「仇を討て、というのが世の常であるものを……」

しばしの間、法廷に深い沈黙が訪れた。誰一人、言葉を発する者はいなかった。

その後、師父に師事することになった私に

は、そのときの様子がありありと心にうかんでくる。美作稲岡庄の押領使漆間時国様の独り子であられた師父勢至丸は、父母に深く愛されて育ち、豪族の子として武芸に、勉学にまた近隣の村びとの子どもたちと遊びたわむれる幸多い日々をお過ごしになった。

が、そんなのどかな幼年のある日突然、稲岡庄の預かり所、明石定明一派が父君を襲撃する、という悲劇がおそう。師父は父君を助けんとして、物陰から定明目がけて矢を放たれたというが、九歳の少年が放った矢で受けた定明の傷は浅く、父君が定明からうけた傷は致命傷であった。

父君に取りすがって泣きさけび、復讐を誓う師父に、最期の力をふりしぼって父君は「敵人を恨んではならぬ。汝は一刻もはやく出家して恩讐を超える解脱の道をもとめよ」と遺言されたのである。

「ご立派な父君じゃ。聖者のごときご遺言じゃ」やがて女院は胸元から懷紙をとりだして、涙を拭いながら呟くように言われた。「し

て叡山に登られてか。それにしても、敵人を恨んではならぬとは重いご遺言でありましたのう。御房にもいかばかり苦しまれたか」

「お言葉、まことに畏れ多く存じます」

と師父は、

「叡山で勉学に励みましたのは、真実、父の最期のことば忘れがたく、思讐を超える解脱の道をもとめたことでございました。しかし、父の遺言にそむくことを悲しみながらも仇を仇と思う心から長い歲月、私は離れられませんでした」

「おお」

女院は感嘆したようにいわれた。

「それでこそ、御房は血のかよった人間というもの。父君のご遺言を心底重くうけとめたなればこそそのことでありましょうぞ」

女院のことばに、席に連なる人々のあいだにざわめきが起こった。

「御房にかかる悲運がありましたとは!」

「まことにお気の毒な……」

「親の仇は忘れられるものではあるまい」

「お勞しや…」

人々は袖で顔を覆ってささやきあつた。

父君のご遺言を受けて『はい分かりました。そういたします』ときれいさつぱり何もなかったことにする者がいるとすれば、それは心の底の薄い者であろう。叡山に登られた後も長い年月、師父の御苦しみは深まり、迷いは深まるばかりであつたことを、今の私は知っている。

(なぜ、父上はあのような最期を遂げなければならなかったのか)(すべては前世の因縁であるというのか。だとすれば、父上にはどのような因縁がおりになったというのか)(明石定明が憎い。決して許しはせぬ……)師父は山を駆け下りて一気に定明のもとへ押し入りたい衝動をお感じになった日もあつたという。

「そこで、善導大師の著書に出会われたか」
人々のざわめきが落ち着くと、感動を隠しきれぬ面持ちで兼実が訊ねた。

この後、嗣子良通を若くして亡くし、建久

七年(1197)の政変では藤原通親との政争に敗れて権力の座を追われることになった兼実は、師父に帰依する心日々に深まり、今では師父をしばしば自邸にお招きしてはみずから庭先に出てお出迎えするまでになっていると聞くけれど、あのころはまだ、世間に噂のたかい高德の聖の御一人として師父に対していたと思う。

「大師の著書に出会うまでには長い歳月がありました」

師父はそう兼実に応えられると、

「父の遺言が私の心に深く落ちてまいりましたはじめは、師僧叡空上人の許しをえて下山し、嵯峨の清涼寺に七日間参籠したときでございます」

「ほう、清涼寺にな。あの寺には私もいくたびとなく参詣してきたが。七日間のご利益がありましたか」

女院様がお訊ねになった。

「寺のまわりには飢えと病に苦しむ者たちが物乞いをして群れあつまっておりまして。そ

の者たちがご本尊の釈迦如来像のまわりを遠く近くかこんでわが身の悲しみや物を乞う訴えをつたない言葉で訴えております。その訴えを耳にしながら私は参籠しておりましたが、ふと、参籠しはじめた時の自身の心が一変しているのに気づきました」

「ほう、心がのう。どのようにお変わりになりましたかの」

「父を討たれた恨みの消えぬ心が消え失せ、いつしかわれひと共の一切衆生の救いを願う心になり変わっていたのでございます。清涼寺に参籠して、私は生まれ変わりました。この日から、私の新たな求道がはじまりました」

「新たな求道とは」女院がお訊ねになる。

「一切衆生救済の道でございます」

「して二十五年を」

「闇が消え失せました」

「おお、それが善導大師の経釈であつたか」

「一刹那のことでございました」

「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」

女院は思わず念称されると、法廷につらな

る人々のあいだからも思わず知らず念仏の聲があがった。

師父との最初の出会いであつたこの日から何年が経つたことだろう。この日から、私は少しずつではあるが、自分が置かれた人生を自分なりに生きていく女になつていった。

「治天の君」と称された後白河の皇女に生まれ、賀茂の斎院となり、二十一歳で退下して内乱の世に置かれてきた私は、次第に感情というものを失つた女になつていたのである。今にして思えば、感情を失つて生きることが私自身を守る智慧であつたと思う。そんな女であつた私にどうして歌が詠めようか。

師父に初めてまみえたあのころ、私の歌の師匠の俊成は勅撰『千載集』の撰進を命じられていて、私にもしきりに歌を詠ませようと指導してくれたけれど、私にはその意欲がなく、心から湧きでる感情がなかった。

今、『千載集』に俊成が何首か採用した私の歌を思い出せば、その通り一遍な歌いように我ながらおどろいてしまう。(つづく)

町医者雑記帳

コロナとの 根競べ

ゆき医院

大田由己子

おおたゆき

群馬県高崎市生まれ（浄土宗安国寺）
1975年、東京女子医科大学卒業。同大消化器
内科に入局。1983年、医学博士。1988年、
外務省入省。一等書記官・医務官としてアルゼン
チン日本国大使館に赴任。帰国後、自治医科大学
消化器内科講師。大正大学人間科学非常勤講師。
2004年、文京区本郷にゆき医院を開院。

文字通りの親譲りの無鉄砲で、地縁も何もない中で始めてしまった町医者稼業。青息吐息の日々でしたが何とか大過なく15年余りが過ぎ、ほっと一息ついた頃にそれは始まりました。コロナ禍です。まさか生きている間にこの医療現場でパンデミックに直面するとは想像すらしていませんでした。世界中の誰もがかつて経験したことのないコロナ禍。1年半以上が経過した今もお収束への道筋も見通せない不安な日々が続いています。

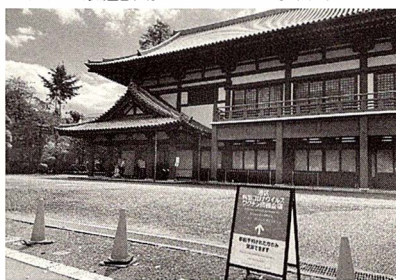
強力な治療薬も無いなかで唯一の切り札となりそうなワクチン接種が始まりました。予約が開始された日には電話は一向につながらず、インターネットやスマホとは無縁の高齢者の怒りは頂点に達したかに見えました。それでも接種を終えた方達が増えるにつれ、診察室にも少しずつ笑顔が戻り始めたことが何よりもうれしい出来事です。やっと孫に会える、デパ地下においしいものを買うに行ける、葬儀にも出られず心残りだった父親のお墓参

りに行ける等々、じつと巢窠り生活に耐えていた方々のもとに待ち焦がれていた日がようやく戻ってきたというわけです。その後、接種対象者の拡大と共にいつもは静かな町の診療所でも予約あるいはキャンセルの電話がひっきりなしにかかるようになり、しばしば診療の妨げになるという事態を迎えました。一日も早く、誰よりも早くと接種を求め、周囲の人たちにも乗り遅れまいとするまさにワクチン競争曲(ワ)が今日も鳴り響いています。ほかにも難問山積。連動していない複数のシステムへの入力や報告書作成、日々変わる通達事項など接種そのものの実務を超える煩雑な作業が増え、ワクチン供給の不安定さにも翻弄されています。希望する人にはいつでも、どこでも、無料でワクチンを受けることができ、その場で接種証明書が発行されるという国も少なくない昨今、もつと簡便に、肅々と速やかに進むシステムを作ることができないのか、と町医者 of 愚痴は尽きることがありません。

当初、日本人の生真面目さや何事にも慎重、堅実を重んじる姿勢が感染爆発を防ぐことに大きな役割を果たしました。と同時に今回のような緊急時にはそれがむしろブレーキとなり対応が遅れることにもなりかねません。逼迫する医療現場にとって、柔軟かつ迅速に対応できるシステム作りこそが喫緊の課題なのです。

ワクチンは接種することによって感染しにくくなる、接種した人が多くなれば受けてい

ワクチン接種会場になった増上寺(東京・港区)



ない人を守る壁になることができる、ウイルスの特徴を体に覚えさせることによって免疫力を高め、たとえ感染しても軽症で済む可能性があります。もちろんこのワクチン接種には個人差があり、体質や治療中の病気のために打ちたくても打てない人もいます。ワクチンの副反応に対する不安や自分はコロナには罹らないから大丈夫だと言って打たないと決めている人もいます。mRNAという今までにない新しい形のワクチンであることが様々な憶測を呼び、その危険性を訴えるワクチン反対派もいます。SNS上ではいささか情報過多に陥り、ことに若い世代でワクチン接種を希望しない人が多くみられるようです。もちろん同調圧力といった強制や、打たないことによる差別や偏見にさらされたり、不利益をこうむったりすることはあつてはなりません。

誰のために、何のためにワクチンを打つかを自分で決めることができない若者も少な

くありません。いずれにせよ、一人一人がその恩恵とリスクを天秤にかけ、自分自身で考えて決めたものです。どんな場合でも自分で決めることは勇気のいることです。何か起こった時に自分の意志でやったという覚悟がなければたちまち生きている世界も揺らぎかねません。

『法句経』に

「己こそ己の寄る辺 己を描きて誰に由るべ
ぞ よく整えし己にこそ まこと得難き
寄る辺をぞ獲ん」

(友松圓諦訳 第12品 160)

という一説があります。亡き父からは私を由己子と名付けた由来だと聞いています。もう一度この言葉をかみしめながら今日もまた老体に鞭打ち、ワクチン競争曲が鳴り響く診療所へと向かいます。

まだまだコロナとの根競べが続きます。

インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No. 14

インド・釈尊あれこれ紀行

王舎城を歩く「ウォーキングフォーピース」



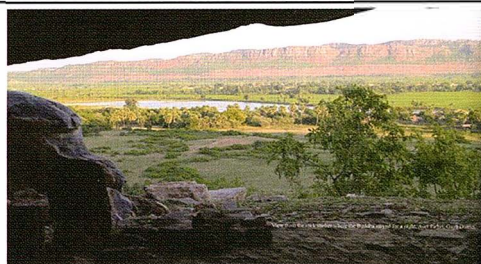
2016年の「ウォーキングフォーピース」に参加した著者。右から二人目



王舎城巡礼
(ウォーキングフォーピース)

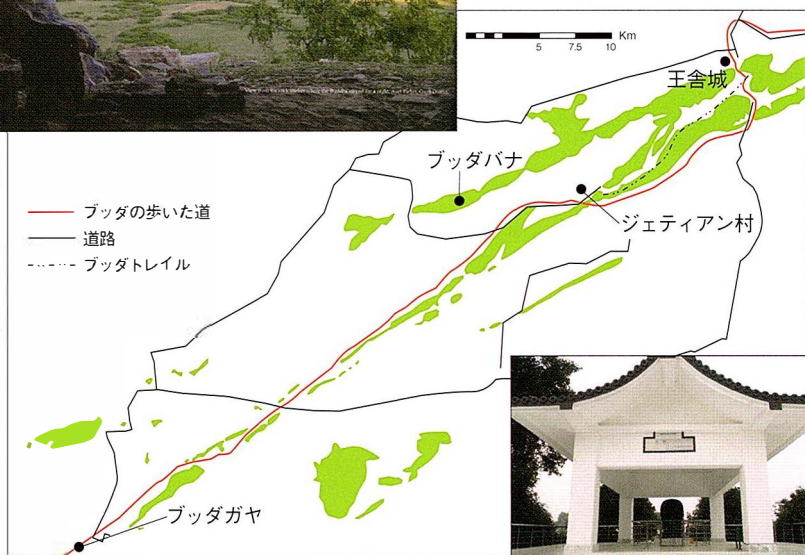
インド渡航歴40回超！

佐藤良純のインド・釈尊あれこれ紀行 No.14

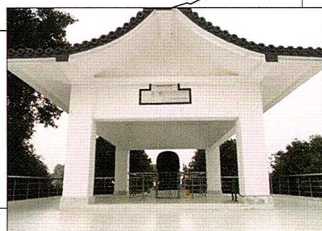


王舎城ブッダトレイル

釈尊が泊まったブッダバナの洞窟から谷を望む



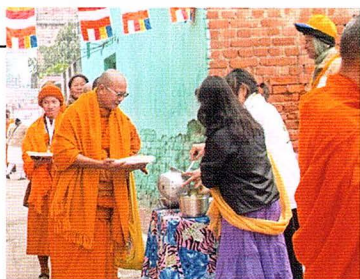
ジェティアン村にある四国青年仏教会寄進の祠堂



今回は王舎城の南西から北東へ、釈尊が歩いた道をたどる。ブッダガヤからガヤを経て尼連禪河を渡り旧道を北東に歩くと王舎城に入る。釈尊が一夜を過ごしたブッダバナと呼ばれる小さな洞窟は、玄奘三蔵も一夜を過ごした場所、今でも石の仏像や仏塔の破片が多く見られる。

木の生えていない岩山の中腹にあり、村人以外の人が訪れるとすぐに見つかる。私が訪れた2回ともすぐ見つかり、20〜30人の子供たちが集まった。こうした立地ゆえ、盗掘を防いでいた。

そこから北西に進むとジェティアン村に着く。日本の四国青年仏教会が寄進した祠堂が建っている。村には、釈尊が持っていた杖を地面に突き刺したところ木が生えた、という話が残っている。また、釈尊時代のままの細い小道が村の中を通っている。村人が釈尊や弟子たちに食事、衣料、日用品を布施したに



ジェティアン村での判り入れと托鉢

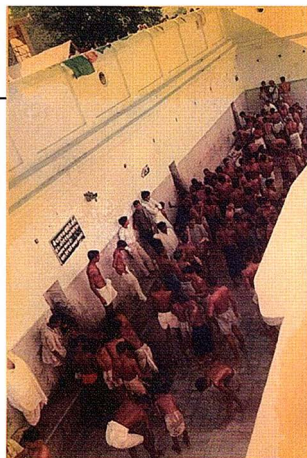


違う。

余談ながら、衣を布施する儀式はカティナ会と呼ばれ一年に一度盛大に行われる。この儀式はインド各地はもちろん、タイ、ミャンマー、シユリランカでも行われる。衣は三衣さんねと呼ばれ、持つと意外に重く、隠しポケットが多く付いている。パンコクには衣、仏像その他の仏具、線香などを扱う店が立ち並ぶ町がある。

王舎城に戻る。現在でもほとんど人が通らない丘の北側の道がジュティアン村から竹林精舎の裏側に通じている。私が訪れた60年前は盗賊が出たので、特に夜は誰も通らない。いまだに人家が一軒もないながら、あの頃よりは安全にはなった。

また、ジェティアン村から王舎城の東西には温泉が点在している。大昔はこの辺は火山帯で、事実18世紀にはビハール州大地震のため、ケサリアの大塔が崩れている。



釈尊、大迦葉尊者の衣交換の像。上部が欠けている

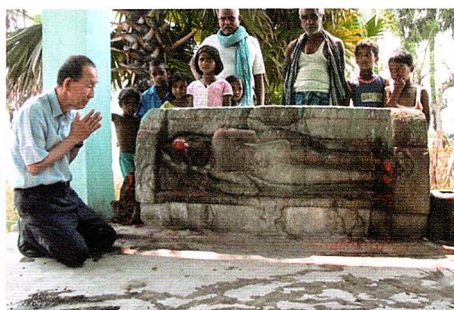


佐藤良純

太正大学名誉教授

さとう・りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。太正大学同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より太正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、太正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有回数。著書に『ブツダガヤ大菩提寺』、『釈尊の生涯』など多数。

農村に散逸する仏像。合掌供養する筆者



王舎城を含め仏跡が多数残るビハール州は、インド北部ガンジス河の沿岸に広がるが、その名は僧院を意味するビハールに由来する。ナーランダ大学のデイバック・アーナンダ氏はビハール州内を調査、188の村の農家の庭先や畑の中に仏像や菩薩像が散逸していることを報告している。玄奘三蔵も17の遺跡を記している。

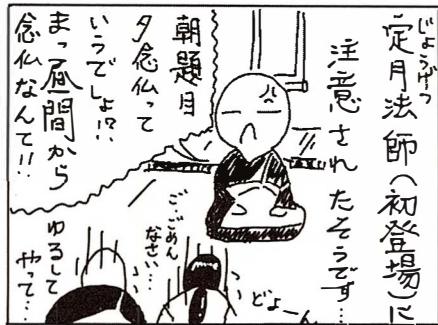
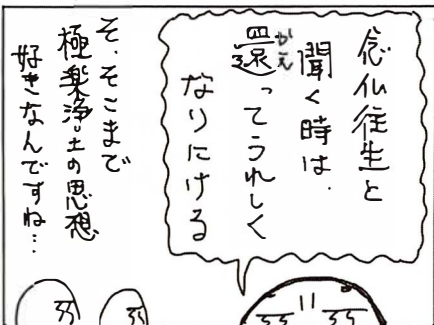
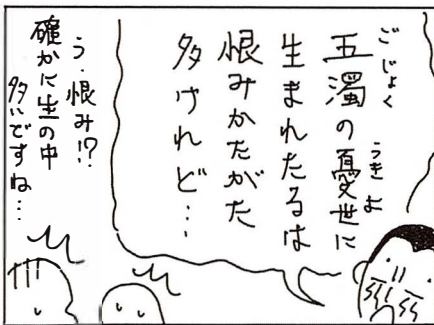
この中に釈尊が大迦葉尊者と衣を交換する像が残っている。ひざまずく姿の頭部を欠く尊者像だが、台座の刻文を読み取れる。ナーランダ大学そばのジュアファルデーには目連尊者の記念塔もあるが、発掘して日が経ち、今では瓦礫に覆われている。そのそばにあるルックミスターナと呼ぶ小さな丘は、ナーランダ寺院が蒙古軍に襲われた時の避難場所であったと伝えられている。

浄土宗のお祖師様

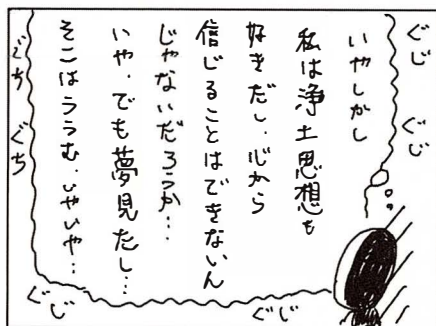
その2

三祖良忠

竹第参話



くんじまん 1978年千葉県生まれ。浄土宗のお坊さん



浄土宗の青年僧侶に伝えたい

ぶつぶつ 放談

今シリーズの登場者がマンガを取り入れた授業を大正大学で行っている。仏教への入り口にマンガを取り入れた講義で、学生からも好評とのこと。マンガから入る仏教は身近なものになっているようだ。

(聞き手・編集 服部祐淳)

◆登場者◆

佐山拓郎

さやま・たくろう



1975年 東京都台東区生まれ。東京教区・根岸 西念寺所屬。大正大学仏教学部卒業。ジブリ原作者の父の影響で、幼少よりサブカルチャーに親しみ、仏教と融合させた法話を実践、webサイト「ここより」で「ドラゴンボール法話」を連載。また「ドラクエ法話」も行う。著書『流されない練習』（三笠書房・知的生きかた文庫）。今号のおすすめは十日草輔さんの『王様ランキング』

工藤量導

くどう・りょうどう



1980年 青森県今別町生まれ。青森教区・東津軽郡 本覚寺副住職。大正大学大学院仏教学部仏教学科博士後期課程終了（博士・仏教学）。専門は中国隋唐代の浄土教思想。著書『迦才「浄土論」と中国浄土教―凡天化土往生説の思想形成―』（法藏館）。現在、浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師、淑徳大学兼任講師、ひとさじの会理事。夏のおすすめマンガは緑川ゆき『螢火の杜へ』

仏教×マンガ ②

大橋雄人

おおはし・ゆうにん



1981年 神奈川県川崎市生まれ。神奈川教区高津・大蓮寺住職。大正大学仏教学科卒業。大正大学大学院修了。博士（仏教学）。大正大学非常勤講師、浄土宗総合研究所研究員、大本山光明寺記主・禅師研究所研究員。ほか全国浄土宗青年会幹事、全日本仏教青年会事務局次長なども務める。今月のおすすめマンガは荒川弘『銀の匙 Silver Spoon』

司会 今回は大橋さんがマンガを取り入れている大正大学の授業の話からお願いします。

大橋 5年前、大学で講義を持つことになった時、僧侶を志す学生以外も受ける仏教の講義の担当を依頼され、小難しく仏教の概論を話しても一般の学生には響かないのではと思い、マンガをレポートの題材にして仏教に親しんでもらおうと思ったのがきっかけです。

司会 なるほど。

大橋 最初に授業形式で「お釈迦さまの生涯」「仏教の歴史・思想」などの基礎知識を伝えたいので、仏教マンガを各自で読んでもらってレポートを提出してもらいます。

前号で紹介されたマンガを含み、私が調べた仏教マンガの一覧を学生に提示します。ですが、それ以外のマンガでも自分で読み解いて「ここに仏教観が現れている」といった視点のレポートも認めています。昨年度は『鬼

滅の刃』が三分の一くらい占めましたが(笑)。司会 『鬼滅の刃』はおそらく流行語大賞になる勢いですからね。

大橋 それでもレポートでは「調べれば調べるとほど仏教の魅力に気づけた」「自覚なく仏教的な視点を自身が持っていたことに大変な驚きを感じた」など、発見も多いようで仏教入門としては成功しているのかと……。

工藤 その「自覚なく」って、学生にすごく多いですよ。私も大学でお釈迦さまの考えや死生観など、仏教入門の授業をしています。が、「自分の考えていたことと一致しているところに気づいた」という声が多いです。

これは日本社会の中に仏教が当たり前になっていて、私たちは知らないうちにその土壌が育てた文化・思想の中で生活しているからだと思います。そうして仏教に興味をわいたところで手塚治虫の『ブッダ』を読むと、

「ああ、ここがその価値観の源泉だった！」って気づくのですよね。

佐山 ぜひ手塚の『ブッダ』は学生だけでなく全国民が一度は読んで欲しいですね。

大橋 でも残念ながら仏教学科の学生でも多くは『ブッダ』を読んでいないですね。マンガ自体読まない学生も結構いますし。

佐山 私はほとんどお寺を手伝わない子で、祖父や父がなんでお経を読んでいるんだろうという具合でした。それが中学に入り、手塚治虫の『ブッダ』に出会い、一巻目で心を揺さぶられました。奴隷の子の母親が槍で刺されて死んでしまうシーンがあるのですが、こういう理不尽なことを救おうとしているのが仏教なのだ、と気づかされたのが私の仏教との出会いでもあります。お寺の子だったけどマンガで仏教と出会った（笑）。

司会 やはり源泉たる、手塚ブッダは若い

方にも一度は見てもらいたいですね。

さて、仏教マンガもいわゆる真面目路線のイメージがありましたが、最近は変わってきているのでしょうか。

大橋 学生の最初のイメージもそうですね。仏教マンガはマンガではあるけれど、硬い、難しそうという印象があるようです。

工藤 修行や祖師を尊ぶ劇画調のマンガから始まり、徐々に幅がでてきて、道に迷っている等身大の僧侶を描く作品も多くなってきましたね。『あつかんベエ一休』なんかは元祖かもしれません。近年、女性作家が描く僧侶像は新たな展開を見せています。

朔ユキ蔵の『お慕い申し上げます』は性的なことにまで踏み込んでいて、よくぞそままで描いたなと思うほどですが、それがヒットにつながりました。おそらく本木雅弘主演で映画化もされた岡野玲子の『ファンシイダン

『ブッダ』を読んで

仏教学科2年生(男子)

主人公のシッダルダは、かなりの数の悩みに苦しみ続けていた。最初からは何も分かっていず、長い年月をかけてじっくり解決していき、ようやく真理にたどり着き、悟りを開いた。なので、僕は悩んでもいいと感じた。焦ることはなく、逆に悩むことが必要なのかもしれない。真剣に考えてからこそ、ちゃんとした答えが出るのだと思った。

これは僕も含めた現在の若い世代の人たちにも同じことが言えるに違いない。

『病室で念仏を唱えないでください』を読んで

人間環境学科2年生(男子)

患者や同僚の言動について怒ってしまった、幼馴染や同僚の女性との関係に悩むなど、主



人公のまだまだ僧侶として未熟なことや、ただけ手を尽くしても救えない命があるということなど、何事も完璧に進んでいくわけではないというリアルさがとても魅力的に感じられた。

『鬼滅の刃』を読んで

仏教学科3年生(女子)

『鬼滅の刃』は登場人物が完全に善と悪に分かれている物語ではなく、敵と味方のどちらにもそれぞれの想いがあり、鬼にも鬼殺隊のどちらにも愛着が湧いた。なぜなら、この作品に出てくる鬼は必ずしも最初からの悪ではなく、鬼になった理由や経緯があるからだ。

鬼が鬼殺隊の隊員に滅される時、自分が人間だった頃の走馬灯を見るが、その想いを主人公の炭治郎が汲み取り、楽を与える姿に感動した。

(学生の感想文より要約・抜粋)



大正大学:文化の探求「身近な仏教を知る」

(担当・大橋雄人)

一般学生の
仏教マンガ
読後感想文

ス』あたりから僧侶の人間性をリアルに捉えた作品が増えてきたように思えます。

司会 女性作家ならではの視点でしょうか。

工藤 そういう面もあると思います。少し真面目路線でいうと杜康潤の『坊主デイズ』も臨済宗の僧侶をモデルに描くのですが、とてもリアルに描かれています。宗派が変わればこんなに違うのかとカルチャーショックを受けるほどです。

大橋 師僧に会うまでに何日間か、玄関に座らなければならぬ、とかですよ（笑）。

司会 昔はそこまで僧侶に焦点をあてた作品はなかったですし、あってもヒットはしなかったですよ。

大橋 仏教マンガの定義について、曹洞宗の僧侶でマンガ研究家でもある吉村昇洋さんが次のように分類されています。

①釈尊や歴史上の僧侶の伝記をマンガ化

②仏教の物語や思想などをマンガ化

③現代の仏教者の実情や生活をマンガ化

④仏教モチーフのキャラや世界観を取り入れる
具体的に挙げると、

①は『ブッダ』手塚治虫など

②は『マンガ 禅の思想』蔡志忠など、

③は『ファンシィダンス』岡野玲子など、

④が『鬼滅の刃』や『鬼灯の冷徹』など

おおよそ90年代までは①②が大半を占めていて、2000年代から③④が一気に増えてきたといわれています。

工藤 実際、学生が思い浮かべる仏教マンガというと①です。求道的であこがれる部分がある半面、当事者である寺の息子からすると偉大すぎて実像とずれてくるともあると思います。実像は誰かが亡くなると葬儀や法事を勤める葬式仏教が中心で、『ブッダ』のようにひたすら求道的な姿ばかりではありません

ん。だから私も一通り①②は見てきましたが、やはり面白く読めるのが③④です。

司会 なるほど、今の日本仏教で求道者は少ないですね。

工藤 そして、仏教ティストをモチーフとした作品以外にも、「日本の地域社会の中のお坊さん」という姿もマンガには出てきますよね。『ドッジ弾平』の珍念とか。

佐山 いましたね。

工藤 ああいう街の中のキャラクターの一人として描かれる方が今の読者には自然に受け入れられるのかもしれませんが。私の好きな『海街Diary』にも「街の和尚さん」としてお坊さんが自然に描かれているのですよね。決して偉い人ではなく、一市民で、むしろどちらかといえば俗っぽい（笑）。

佐山 『男はつらいよ』に出てくる帝釈天の御前様とは時代的に変わってきているのでしょ

うね。

工藤 身近な雰囲気で描かれることが多いので、実際に作者の周りでモデルになるお坊さんがいるでしょうね。いないと描けないですよ、ね、恐れ多い感じがして。だから少し俗っぽく可愛げなのだけれど、いざとなれば真面目なキャラが多いのかもしれませんが。

司会 佐山さんはWEB上で公開されている『ドラゴンボール』を題材にした法話が好評ですね。

佐山 先ほどの学生の話ではないですが、子ども頃読んでいたマンガを読み返してみると「あれ、これ仏教的だな」と思うのです。亀仙人が悟空に最初に教える「武道を志すのは強くなることを目的とするのではなく、強くなったことで得られる余裕で人生を面白くおかしく過ごしてしまおう」は、理念的には覚りではないかと感じています。

大橋 鳥山明さんは仏教を意識して描いているわけではないのでしょけれど、戦いに敗れて亡くなれば、天国、地獄という来世が描かれているのは日本人が自然と持ちうる世界観ですよ。

佐山 浄土宗では「共生^{せいどせいごう}」という思想を大事にしていますが、この「共生」は今生きている横のつながりと共に、先祖や未来の子孫など縦のつながりも大事にします。

ドラゴンボールでいえば師から伝えられた教えを自身でかみ砕いて、弟子や子どもに伝えていくという考えはまさに「共生」。悟空が偉いのは師である亀仙人から伝えられたこと最後まで実践し、悟飯（長男）や悟天（次男）にまでしっかり伝えていることです。

あと、亀仙人はああ見えて結構俯瞰的に論ずこともあって、殺し屋にあこがれていた天津飯という武道家とこぶしを交えた時に、「そ

れでは人生が空しくなってしまうから」と、別の道を示し、自ら負けていくのです。新たな視点を提示して、考える余地を与えるってお釈迦さまのようですよ。結果的に天津飯は悟空の仲間になります。

工藤 負けの美学って日本人は理解できませんが、世界的には当たり前ではないのかもしれないですね。諦観^{ていかん}というか無常観は、日本的もしくは東アジア的な受け止め方。亀仙人の美学はそこに通じるところがある気がします。

佐山 少年マンガのヒットの三大原則といわれる「友情・努力・勝利」ですが、私はこれを「布施・精進・智慧」だと思っています。

工藤 それいいですね！

佐山 智慧は六波羅蜜の総合地点で、そこを目指して生きていくのですが、まさに目的に向けて歩むプロセスは共通する部分が大いにあります。

工藤 布施と友情がリンクするのはとてもいいですね。布施は六波羅蜜だと利他の領域にあたるわけで、友情は相手を慮って行動する部分がありますし。

司会 なるほど友情が布施ですか。これはいい例えですね。ところでマンガ家さんは仏教を意識して作品を描いているのでしょうか。

佐山 おそらく手塚治虫は意識的に描いていたと思います。『ブッダ』『火の鳥』はもちろん、仏教マンガには分類されない『ブラックジャック』も仏教エッセンスが活かされています。

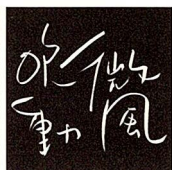
工藤 手塚作品って中国、韓国を含めた東アジア仏教圏を覆う因果応報の理念が深く根付いていますよね。やっぱりその理念がベースにあると自然とシビアナ世界観になるのだと思います。

最近だとおかざき真里の『阿・吽』がシビ

アかつシリアスな路線を追求していますが、とにかくカッコいい。最澄と空海をモデルに描いていますが、著者が熱心に研究しているという熱量も伝わってきます。『あっかんベエ一休』も巻末にずらっと参考文献が並んでいて、こちらも研究者的な視点で描かれた面白さがあります。

佐山 現代の作家さんは、こういう作品を描きたいと研究して描き始めるのに対し、古い作家さんは描いているうちに自然と仏教に寄っていった作品が多いと思います。ジョージ秋山やちばてつやなどは人間を描いているうちに、自然と因果に触れざるを得なくなつた。トキワ荘にいた作家やさいとうたかをの世代もそうですが、もう仏教が血肉化されて染み付いているのでしょうか。

司会 なるほど、作家の世代でだいぶ変わってきますね。ではこの続きは次回で。(つづく)



微

風

吹

動

この世と不可思議

「人間の知恵は愚かさと同居している」

(『猿の惑問』145)

名 和 清 隆

自坊の隅にある家庭菜園。ボロボロの家屋を自ら解体し、スコップも入らないカチカチの地面を耕したのが30年ほど前である。それ以来「ああでもない、こうでもない」と、書籍やインターネット、また愛好家からのアドバイスで得た知識をもとに試行錯誤を繰り返してきた。

春〜夏にはきゅうり、なす、トマト、ゴーヤ、枝豆、インゲン、オクラなど。秋〜冬には大根、ブロッコリー、ホウレンソウなどであろうか。おなじみの野菜だけでなく、新たな野菜に挑戦するのも楽しいものだ。

それにしても今年は豊作である。7月に入る頃には連日ザル一杯の野菜が採れ続け、最初の頃は収穫を見て笑顔であった妻も、あつという間に大量の野菜に顔を曇らせるようになり、野菜の引き取り手をせつせと探すほどであった。不作であった昨年とは打って変わっての豊作ぶり。長年、野菜を育ててきたが、昨年ほどの不作も記憶になく、今年ほどの豊作も記憶にない。昨年と今年で育て方を変えた点はなく、天候にも大きな違いがないと思う。おそらく私の知恵が及ばぬ何かが影響しているのだろうが、全くもって「不可思議」である。

話は変わるが、先日「猿の惑星」という映画をビデオで見た。1968年にアメリカで公開された、言わずと知れたSF映画の金字塔である。50年以上前の作品であるが、物語の持つメッセージ性、映像の迫力は現在でも十分に見応

なわ せいりゅう 1972年埼玉県桶川市生まれ。埼玉教区浄念寺住職。早稲田大学第一文学部卒業、大正大学大学院博士課程満期終了。浄土宗総合研究所研究員、淑徳大学、大正大学、亜細亜大学非常勤講師。専門は宗教学。

えのある作品であった。少々冗長になるが、あらずじを紹介しよう。

地球から旅立った宇宙飛行士テイラーが到着したのは、出発した時点から2000年後のある惑星。この惑星では、知性を持つ猿が知性を持たない人間を支配していた。猿たちは、知性をもつ人間であるテイラーを偶然捕えたことにより、緊急の宗教裁判が開かれる。なぜなら、猿たちの聖書には、「神は自分に似せて猿をつくり靈魂を与え、世界の主人とさせた。」とあり、「猿は人間から進化した」という進化論は危険視されている。知性を持ったテイラーという存在が、猿は人間から進化したという証明となってしまうからである。

裁判の途中、何とかして逃げ出したテイラーは、偶然、この星にかつて知性を持つ人間が暮らしていた痕跡を発見するが、猿の宗教的リーダーは、実はこの事実を知っていた。猿のリーダーは言う。「なぜ、人間は滅びたのだと思う？人間は悪魔の使い、霊長類でありながら気晴らしや欲望のために殺す。土地を奪うために同胞を殺す。人間が増えたと、あらゆる土地を砂漠にかえる。」「人間の知恵は愚かさと同居している。」と。

物語の最後、テイラーは海沿いに逃げるが、そこで朽ち果てた自由の女神を発見し驚愕する。この猿の惑星は、人間によって破滅させられた地球の未来であったのである。

この物語は、人間の欲望の恐ろしさを見事に抉り出しているが、「人間の知

恵は愚かさと同居している」という、猿の惑星のリーダーによる言葉が心に刺さる。

この夏、世間では様々な出来事があった。大雨による土砂崩れ、未だコロナが収束しない中でのオリンピックなど。災害も災厄も、これだけ人間が振り回されているのだから、人知を超えた不可思議なるものと言わざるを得ない。しかしこれら不可思議なるものに対する、人間の対応は如何であっただろうか？人間の都合によるエゴが優先されたがゆえに、多くの悲しみを生んだ側面も否定はできない。

「不可思議」とは仏教語で、本来は仏・菩薩のさとり境地、智慧、功德などが凡夫の思慮の及ばないものであるという意味で、転じて人知の及ばないという意味を持つ。

猿である孫悟空は、お釈迦様の掌の上を逃げ回ったすえに、お釈迦様の偉大さを知り帰依をしたではないか。人知の及ばぬ不可思議に対し畏れ、敬意を払い対処をすること。これこそ人間の知恵であろう。

この世界は不可思議なことで溢れている。「人間の知恵は愚かさと同居している。」この猿からの警告を大切にしたい。

江戸 日本の 街道 探訪

家康の
全国道路網
造り

第七回

東海道(5) 街道の難所 その二

森 清鑑

金谷から小夜の中山、 日坂宿へ

につさか

大井川を渡る。すると眼前には山登りが待っている。しばらく登ると、51軒の旅籠屋が山肌へばりつくようにある。金谷の宿。しばし休憩を取って、重たい腰を上げる。急峻な峠道で上り坂、下り坂が続く。そして最後に小夜の中山と呼ばれる長く急激な下り坂を過ぎるとようやく日坂宿に着く。小夜の中山は箱根に次ぐ東海道の難路である。



東海道名所風景：国貞：小夜中山：険しい崖道を降りる大名行列一行。その先は日坂宿

国貞が東海道名所で画いた小夜中山の光景にはともかく驚かされる。江戸を立てて西国に帰る大名行列が急峻な小夜中山の崖道を降りる姿が描かれている。絵の右辺の行列はまるで墜落しそうだ。殿様と廻りを囲む家来はすでに急坂を降りており、弓だの鉄砲だのを抱えた家来が夜泣き石を囲んでいる図である。

大きな丸い石を夜泣き石という。昔ここで妊婦が殺され、以来、夜になると泣き声が響いた。妊

婦の靈を慰め、この大きな丸い石に南無阿弥陀仏の文字が刻まれる。この時、生まれた子が成人し、母親の仇を討つという話。いかに寂しい道であったかを物語る。

絵の背後に富士が描かれ、大名行列一行の表情がこの坂を降りてくる光景だとわかるが、これが逆に江戸に向かってこの坂を登るとなったらえらいことである。小夜の中山を越え、さらに険しい山道を乗り越え、ついに眼下に広がる大井川を見たとき、旅人は愕然たる思いを抱いたに相違ない。特に大井川の川渡りは難事だったからである。

西行も詠んだ難所

さて、この日坂宿に向かう尾根伝いの険しい道、小夜の中山は広重を始め、多くの画人が描いているが、昔、此処を通った人の和歌や俳句も多く残されている。古くは西行法師の「年たけて またこゆべしと思いきや 命なりけり小夜の中山」(年

老いてからこの山を登ろうと思っても、その気は起きまい。小夜の中山を越えることは、命あつてのことだから)。

西行は東へ下る難所をこう詠んだように、昔、京の都から関東に行くには鈴鹿峠、この小夜の中山、そして箱根という3つの難所を越えねばならなかったのである。

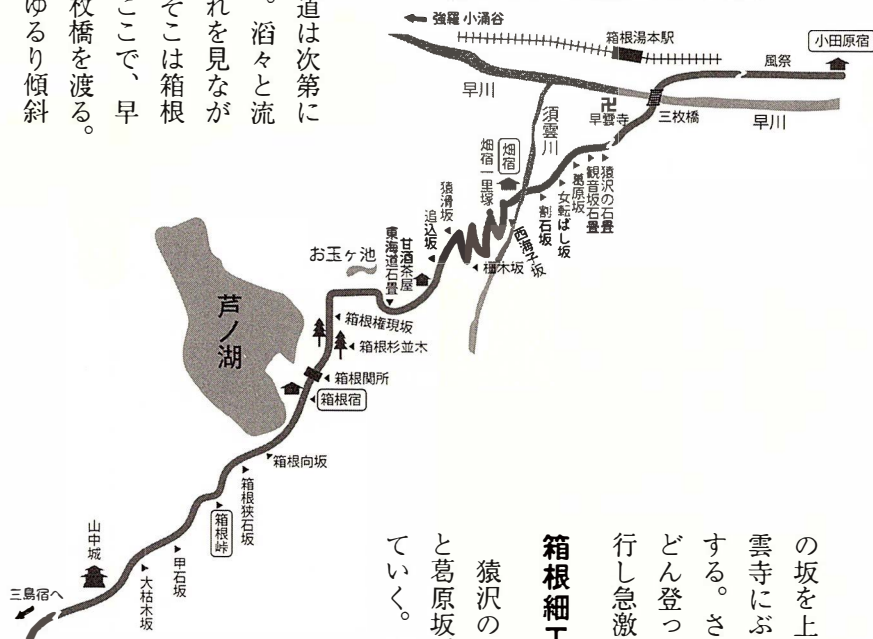
最大の難所、箱根越え

さあ、その箱根越えである。「箱根8里は馬でも越すが……」の馬子唄にある箱根8里とは、江戸から向かった小田原宿から箱根宿までの4里と、箱根宿から三島宿までの4里を指す。言うまでもなく箱根越えは東海道屈指の難所である。

小田原宿を出た旅人は早川と並んで敷設されている東海道を西へ。道はごく平坦な登り。快適な旅路である。すぐに、かまぼこで有名な風祭(鈴鹿)に着く。ここを通過し前方に箱根の山々を

感じながら街道は次第に早川沿となる。滔々と流れる早川の流れを見ながら歩くともうそこは箱根湯本である。ここで、早川に架かる三枚橋を渡る。箱根湯本のゆるり傾斜

東海道箱根越え



箱根細工の畑宿へ

の坂を上がつていくと、広大な北条家の菩提寺早雲寺にぶつかる。東海道はこの寺のすぐ前を通過する。さらに箱根湯本の町並みを眼下に道をどんどん登っていく。湯本の一里塚を過ぎると道は蛇行し急激な坂となる。

猿沢の石畳道、観音坂の石畳道。しばらく行く
と葛原坂。街道は早川の支流、須雲川沿いに登つ
ていく。ややあつて女転ばし坂。この坂でご婦人

さらに割石坂が待っている。この坂を越えるとはばし、普通の山道が続き、煙宿の道祖神が立っている。寄木細工で有名な煙宿はしきぐさどに入る。煙宿は小田原と箱根宿の間宿。一服、休憩した後、煙宿を出ると、すぐに煙宿一里塚がある。街道は蛇行

しながらさらに登っていく。急坂の西海子坂が待っている。立派な石畳が敷かれている。道は蛇行しつつ、今度は檜の木坂を登る。しばらく行くと猿滑坂。ここは割合なだらかな石畳坂である。

辺りは昼なお暗き鬱蒼とした森の中、石畳の道をひたすら登る。昼間でも昔の人はさぞかし心細かったことだろう。江戸初期には、石畳は無かった。このため旅人は雨など降ると泥濘に膝まで浸かって動けなくなることもあった。幕府は、直ちに石畳工事を始める。その後、將軍上洛の度に石畳は整備されている。

甘酒茶屋とお玉が池

急な追込坂を上がる。登り切ってちょっと行くと有名な甘酒茶屋がある。旅人にとっては恵みの茶屋。正面の屏風山を見上げながらの一服は、代え難き悦楽であつたに相違ない。再び重い腰を上げて昼なお暗き石畳の険しい道を登る。突如、視

界が開け、「お玉が池」が右下に見えてくる。しばらく尾根歩き。まもなく道は左に曲がり、下りに入る。木々の間に芦ノ湖がちらりちらり。やがて権現坂を下る。眼下に芦ノ湖が現れ、旅人は難行苦行の果ての箱根越えの安堵感を味わいつつ、杉並木の中を降りていく。この権現坂の光景を描いたのが広重の箱根「湖水図」である。

箱根の関所

さらに杉並木の巨木を縫って芦ノ湖畔を行くと最初に目につくのがかの有名な箱根の関所である。ここは特に「入り鉄砲に出女」を厳重に取り締まった関所として名高い。当初は、鉄砲の取り締まりが厳重に行われたが、幕府が安定するにつれ、出女の取り締まりに絞られていったようである。

関所破りは死刑。江戸時代を通じて、箱根の関所破りは5件あつたという。その後も関所破りに近いのがあつたが、「道に迷った」ことにして処

理したケースが多かったという。なぜなら関所役人も管理不行き届きということで、何らかの注意罰を受ける。そこで、大事でなければ迷い人で始末をつけたと言うわけ。

ところが、この厳格な関所を大名行列が通るとどうなるか。お白州に一列に並んでひれ伏しているのは、関所の役人の方である。行列は何事もなくどうどうと通過。一光斎芳盛の「箱根」の絵はどこか愉快である。

箱根宿

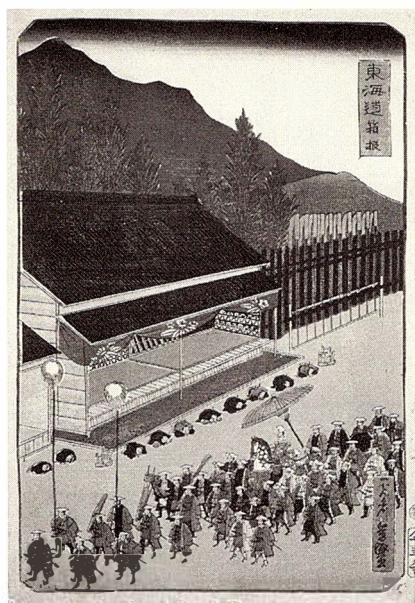
そしてこの厳めしい関所を通過すると箱根宿が待っている。幕府が旧湯坂道を廃止し、新たに芦ノ湖畔に関所と宿場を設けたのが1618年。箱根宿は、小田原宿と三島宿から強制的に旅籠を移住させて造った新しい宿場である。本陣6、脇本陣1、旅籠屋36軒。



瓜重：箱根「湖水図」：大名行列が権現坂を下る、の図。
左に芦ノ湖が見える

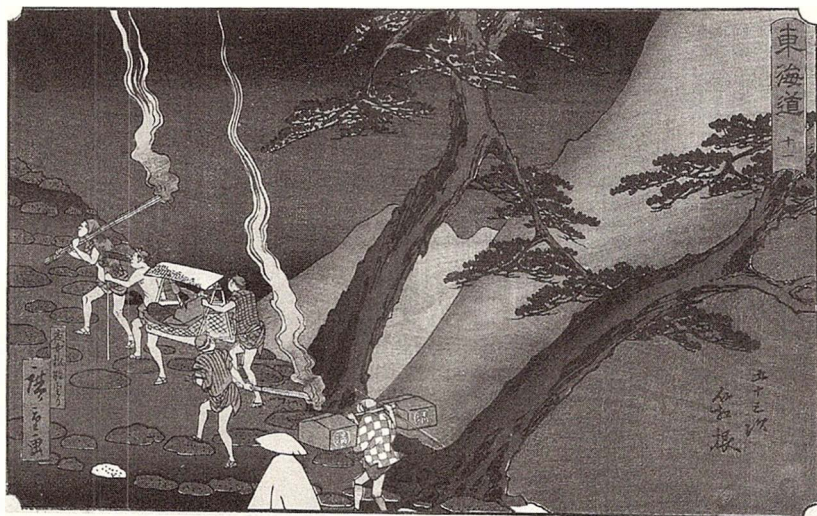
箱根夜中松明登り

箱根越えは、総じて昼なお暗き鬱蒼たる森の中、急峻な石畳の坂道を登るといった感じである。ところが広重は夜の暗闇の中、松明をかざしての籠登坂を描いている。題して「箱根夜中松明登り」。籠の前後に松明を持つ雲助を配し、急峻な石畳を登る籠の姿を描いた。夜間の籠登り。



東海道名所風景「箱根」：一光斎芳盛：関所を通過する大名行列：ひれ伏して出迎えているのは関所の役人一同

関所の開き時間は、明け六ツ（午前6時）から暮れ六ツ（午後6時）まで。となるとこの籠は明け六ツを目指しての夜中の箱根越えか。籠には侍が乗っており、家来が後についている。とにかく緊急事態に相違ない。籠の担ぎ手は疲れると松明持ちと交代する。四人がかりの早籠である。こういう箱根越えもあったのだ。



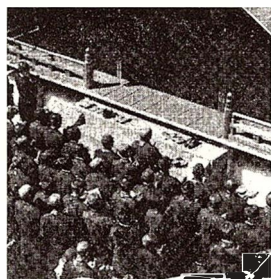
広重：東海道53次箱根夜中松明登り

箱根宿から三島宿へ

箱根宿を出ると箱根駒形神社を抜け、箱根峠を登る（874m）。峠の頂上からは眼下に芦ノ湖が広がり、富士山が眺望できる。まことに美しい展望が広がる。

箱根峠を越えると街道はひたすら下りとなる。途中、北条氏が築いた山中城（豊臣の小田原征伐で陥落、廃城）の脇をとり、三島宿に達する。ここにも所要所の坂道に石畳が施されていた。

もり せいがん
1941年東京生まれ。大学卒業後ドイツ系
商社に入社。その後、海外情報、広告・マー
ケティング調査・分析、インフォメーション
オンデマンドサービス事業に携わる。廃棄
物関連調査 Mori & Associates 主催。



御廟前の結盟宣誓式に1000人が集まった。『浄土教報』2083号より

法然上人鑽仰会の歴史を 浄土宗総合学術大会で発表！

令和3年度浄土宗総合学術大会が
9月9、10日で開催されます。

私が当会デジタル編集部員を拝命
して数ヶ月、この間に少しずつ昭和
10年の設立から、昭和20年までの鑽
仰会の歴史を探ってきました。その
成果を発表する予定ですが、ここで
少しでもあらましを述べたいと思ひ
ます。

昭和9年、真野正順と友松円諦の
両先生は共に仏教復興を目指し、超

宗派の真理運動を起こしました。し
かし、二人は思わぬ行き違いから袂
を分かち、友松先生は「釈迦」に還
り、真野先生は「法然」に還りまし
た。ここに浄土を巡る奇妙なドラマ
があったと思われます。真野先生は、
当時、教学部長だった中村辨康先生
や熱意ある若手僧侶と共に、法然上
人鑽仰会を立ち上げました。法然上
人の人格と教えを鑽仰し、世の中に
打ち出そうとする姿勢に絶賛の風が

巻き起こり、全国各地に支部が出来る
ほど法然鑽仰運動が広まりました。

☆☆☆

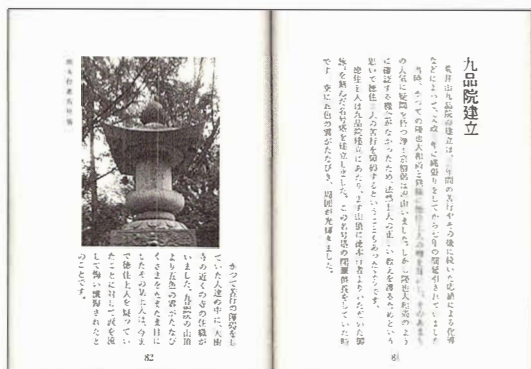
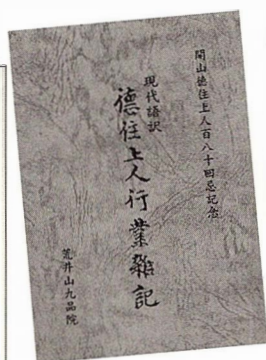
未だ終息しないコロナや頻発する
自然災害など人々の不安は尽きませ
ん。それに対し仏教界では超宗派の
活動が目立ちますが、ここで法然上
人を鑽仰する情熱や愛宗の気持が
起こらなければいけないと感じます。
その想いを育てるためにも、「法然
上人の教えは世の中を救う」という
確信が、全国の信仰運動にまで発展
した事例を、鑽仰会の歴史を通して
紹介できれば幸いです。

皆様のご参加をお待ちしています
が、コロナ感染防止でオンライン配
信になります。

なお、本発表の成果等は月刊誌『浄
土』や新ホームページでも報告させ
ていただきます。

みんなの
境内

開山徳住上人百八十回忌記念
『現代語訳 徳住上人行業雜記』
B5版200ページ非売品



『現代語訳 徳住上人行業雜記』

朝岡知宏（九品院資 愛知・西尾 法蔵尼寺住職）

みんなの 境内

このたび、徳住上人の一代記を現代語訳した本が完成致しました。

徳住上人は徳本行者の高弟の一人です。弟子の中でも特に説法に秀でていた方ですが、その生涯は浄土宗全書所収『徳本行者伝』の附録にある小伝でしか窺い知ることができませんでした。

幸いなことに徳住上人の開山にして墓所である愛知県岡崎市の九品院には遺弟により記された『真阿徳住上人行業雜記』一巻が伝えられており、縁あって写しを閲覧させていただくことができました。しかし非常

に通読しにくい構成になっており、一読ただけでは全体像がつかめませんでした。

そこで九品院住職の鈴木超淳上人に許可を得、編訳という形で現代語訳したものが本書になります。読みやすい言葉に訳しつつも原著の雰囲気を残すことに留意した関係で、檀信徒が読むには少々難しいものとなっております。

しかし、本書により徳住上人の行状に触れていただき、念仏信仰ならびに教化の一助としていただけたら幸いです。希望される方には差し上げますので九品院までご連絡ください。

九品院 電話番号
0564(21) 0951

開設しました……………編集長 村田洋一

法然上人鑽仰会の新ホームページ（HP）を7月4日に開きました。その名は「じょーど」、浄土宗の若手僧侶へ向けたHPです。先月号の奥付に初登場したデジタル編集部員、いずれも30代の若手僧侶ですが、彼らとオンライン会議を重ねること10数回、従来のHPを踏まえつつ、SNSとも連動するHPを作りました。その経緯は「じょーどへの道」（下のQRコードからどうぞ）をご覧ください。開設理由と目的は以下の通りです。

一、Web時代に寄り添って

今や新媒体となったWeb。電車やバスでは老若男女を問わず、9割を超える人がスマホとにらめっこしています。便利なアプリが次々と登場し、仕事も生活もあらゆる事が、掌の上の小さなコンピュータで済ませることができる時代となりました。そうした中、昭和10年設立の歴史ある当会もこの変化を眺めるだけでなく、寄り添ってみることにしました。

一、鑽仰会の新しい役割窓口

設立当時の当会は法然上人の教えを、その人格とともに広げようとする鑽仰運動を目的として月刊誌『浄土』、会報紙『法然鑽仰』を発行しました。また、日本全国、当時は満州や樺太にも支部がありました。当会を牽引された中村辨康師（浄土宗教学部長）が全国の支部で講演、鑽仰運動の旗を振られました。この志は受け継ぎつつ、令和における当会の役割を探る窓口になります。



「じょーどへの道」QRコード

●新ホームページ「じょーど」を

一、浄土宗寺院の明日のために

新型コロナウイルスの感染拡大により、日常生活はもちろん社会生活も大きく変化しました。寺院もその影響を受けています。加速するお寺離れやお墓への意識変化をどう防ぐのか。あるいは新たなお寺の姿を模索するのか。これからのお寺の担い手となる浄土宗の青年僧侶と一緒に考えていく、このHPはそうした媒体に育っていくことを目指します。

一、新サポーターを募ります

歴史ある当会を支えてくれているのは会員の皆様です。当会は設立時から浄土宗と密接な関係が続けてきていますが、会としては独立していて会員会費だけで運営しています。歴史ある当会だけに設立当初からの会員も世代交代、第二世代、第三世代となつていきます。と同時に会員が減少し続けているのが現状です。そうした中、新しい、あるいは再度会員になってくれる皆様の窓口になることを目指しています。

一、広がるWebの可能性

Webの世界は印刷媒体では考えられない起動性、限らない可能性と可変性を備えています。紙媒体とは似て非なるものといっても良いかもしれません。文字、写真、そして動画、見せ方も無限大、そんなWebワールドの知恵、技術、そして可能性を提案してくれるデジタル編集部員が頼りです。30代の彼らの発想や想いがこのホームページを広げていきます。

ツイッター QRコード



http://twitter.com/sangokai_honen

フェイスブックQRコード



<http://facebook.com/sangokaihonen/>

ホームページのQRコード



jodo-sangou.org

編集後記

大本山清浄華院の新法主にあがられた飯田実雄新台は、30年近くも当会を支援して下さっている。ご自坊の長野・駒ヶ根安楽寺も本誌の「寺院紀行」に登場いただいている。そんなご縁から当会新ホームページ開設にあたりご挨拶をいただいた。本誌面でも御礼申し上げたい。

隔月という変則連載だが、ゆき医院の大田由己子医院長にご寄稿いただけたことになった。昨夏にコロナについての原稿をいただいたのが縁の始まり。ゆき医院は東京大学赤門前。打ち合わせ時にコロナで学校に来られなくなった東大生が、通学の時間が勉強に使えると喜んでいるとの話を聞いて驚いた。今号ではご

尊父、大田秀三台下による命名エピソードも興味深い。

「寺院紀行」のこぼれ話。

光照院の吉水住職、今はお酒を全く飲まないそうだが、以前は飲むと目が座り、路上にもよく寝そべったとか。本人曰く「僕も路上に暮らす人と何ら変わりません。自発的に帰る家を失う分、僕の方がひどかった」。真山さんの周辺取材ネタからです。

本ページの前後に法然上人讃仰会新ホームページを紹介している。

QRコードのオンパレードで、何やら落ち着かない読者も多いだろう。しかし、今や「詳しくはWebで」時代。本誌も

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(大本山 清浄華院)
 飯谷勝正(目黒 祐天寺)
 魚尾孝久(三島 願成寺)
 加藤昌康(下北沢 森巖寺)
 河本悠大(函館 称名寺)
 糸原恒久(川越 蓮馨寺)
 糸原勇慈(甲府 瑞泉寺)
 坂田良仁(文京 十方寺)
 佐藤孝雄(鎌倉 高德院)
 佐藤久雄(品川 願行寺)
 佐藤良純(小石川 光圓寺)
 東海林良昌(塩釜 雲上寺)
 高口恭典(大阪 一心寺)
 中島真成(青山 梅窓院)
 中村康雅(清水 実相寺)
 中村瑞貴(仙台 愚鈍院)
 成田昌憲(世田谷 大吉寺)
 野上智徳(静岡 宝台院)
 長谷川岱潤(東京 戒法寺)
 藤田得三(鴻巣 勝願寺)
 堀田卓文(静岡 華陽院)
 本多将敬(両国 同向院)
 松濤泰彦(芝 寶松院)
 水科善隆(長野 寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ jodo.ne.jp/

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

スマホ片手に読む時代に入りつつある、ということですよ。(村田洋一)

編集長
 編集部員

デジタル編集部員

村田洋一
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 平井泰代子
 本原亮道
 服部祐淳
 小路竜嗣
 赤坂明翔

浄土

八十七巻 九月号

昭和十年五月二十日第二種郵便物認可

印刷 令和三年八月二十日
 発行 令和三年九月一日

発行人 佐藤良純
 編集人 長谷川岱潤
 印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七四明照会館四階

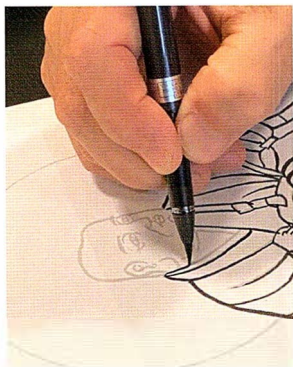
発行所

法然上人讃仰会

電話 〇三(三三)五七八六九四七
 FAX 〇三(三三)五七八七〇三六
 振替 〇〇一八〇・八・八二八七

写シリーズ

便利で書きやすいA4版の奉書で、
誰でもできるなぞり書き仕様です。



写仏

阿弥陀三尊、薬師如来、地藏菩薩、法然上人
1セット6枚の5組入り 5000円

写経

浄土宗日常勤行式(三奉請版、四奉請版)
1セット12枚の5組入り 6000円

写詠歌

宗歌「月かげ」と法然上人四季の御詠歌
1セット5枚の5組入り 3000円

書籍シリーズ

『浄土』連載の単行本から書き下ろしまで、
読み応えのある本をお届けします。

『浄土・念仏読本』復刻版

2000円

『和英対応 法然上人のお言葉』 梶村 昇著、川西良治訳

1000円

『浄土の道』 真野龍海著

1700円

『差し出し人は法然さん』 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

600円

『響流十方』 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

600円

『響流十方』 其の二 袖山榮輝・林田康順・小村正孝共著

640円

※表示価格は定価で税別となります。

ご購入とお問い合わせはこちらへ

ほうねんしょうにんさんこうかい

法然上人讃仰会 105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

TEL 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036 Mail hounen@jodo.ne.jp HP jodo.ne.jp

浄 じょ〜ど 土

法然上人鑽仰会の
新ホームページ
「じょ〜ど」
を開設しました

【目的】

- 一、Web 時代に寄り添って
- 一、鑽仰会の新しい役割の窓口に
- 一、浄土宗寺院の明日のために
- 一、新サポーターを募ります

【特徴】

- 一、『浄土』のバックナンバーが創刊号から読める
- 一、Web版ならではの記事と企画を楽しめる
- 一、SNSと連動し各種情報の交換もできる
- 一、サポーター窓口と刊行物購入窓口にも

**百聞は一見にしかず、
QRコードからご覧下さい！**

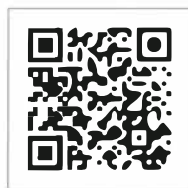
ホームページのQRコード

フェイスブックQRコード

ツイッター QRコード



jodo-sangou.org



[http://facebook.com/
sangokaihonen/](http://facebook.com/sangokaihonen/)



[http://twitter.com/
sangokai_honen](http://twitter.com/sangokai_honen)